

鍾惺の選評に見る批評性

——『唐詩歸』を例に——

0 はじめに

『文選』や『玉臺新詠』の例を擧げるまでもなく、 \wedge 選集 \vee の形式をとる詩文論の展開は古來より多く見られ、時には文學運動を組織・波及させる機能をも擔つて來た。その意味で、 \wedge 選集 \vee は、中國詩文の歴史のごく初期の段階から制度として機能し續けて來たと言えよう。

そのような制度としての \wedge 選集 \vee の歴史を顧みるとき、嘉靖（一五二二～一五六六）萬曆（一五七三～一六二〇）から天啓（一六二一～一六二七）崇禎（一六二八～一六四四）年間にかけての明末という時代は、夥しい數の \wedge 選集 \vee が出版され、それを介した詩文論も盛んに交わされたことで知られる。

本稿では、その中でも竟陵派に分類される鍾惺（一五七四～

兒 島 弘 一 郎

一六二五）の \wedge 選 \vee に關する言説を中心に扱う。鍾惺の言説を扱う意圖は、彼が當時の \wedge 選集 \vee に於けるベストセラー『詩歸』の選者であることが第一に擧げられるが、より本質的には、彼の言説が \wedge 選 \vee という行爲自體に問いを差し向ける自己言及的な構造を持つ點、同時代的にも特異な在り方を呈しているからに他ならない。

1 選者の權力

萬曆四十五年（一六一七年）に書かれた「詩歸序」の冒頭は、次のように始まる。

古人の詩を選して『詩歸』と名付けたのは、古人の詩のすべてが私の選した作品に歸着すると言うわけではなく、私が選した作品を見た人が古人に歸着することを望むか

らである。古人の精神を引いて後人の心目につなげ、後人の心目にとどまるものがあるようにさせる、ただそれだけである。昭明太子が古詩を選した結果、人々はそれを古詩であるとみなす。だから古詩に名付けて「選體」と呼び、唐人の古詩を「唐選」と呼ぶのである。嗚呼、ただ古詩が亡びるのみにとどまらず、古詩の名もあわせて亡びようとしている。なぜか？選したものに人々が歸してしまふからである（原文「人歸之」）。選者の權力（原文「選者之權力」）は人々を歸せしめることが出来る上、古詩を名實ともに選したものに從わせることが出来る。私は決してたやすく選を口にしたりはしない。（『詩歸序』¹より）

『詩歸』と名付けた所以に始まり、△選△そのものについての考察に及んでいる。鍾惺以前および同時代の△選△をめぐる言説には、△選△を経た後の結果（取捨選擇の是非）を問題とするものは多いが、△選△自体を自己言及的に問題化するものは少ない。結果の當否だけが問題視される限り、方法としての△選△は自明のものと見做され、問題にのぼらない。ところが、ここではそれを自明視せずに問題化し、△選△が不可避免的に陥る困難に逢着している。

鍾惺の選評に見る批判性（兒島）

まず、人々が古人の詩に對して抱く「選體」や「唐選」というイメージは、あらかじめ在ったわけではない。無數に近い古人の詩の中から、誰かが△選△した結果、はじめて「選體」なり「唐選」なりと△名△づけられ、認知されるようになった。當然と言えは至極當然の認識が、△選△という方法自体を問い直す契機となっている。「選體」や「唐選」が、△選△という操作を経て作られた古人の詩のイメージにすぎないことを、人々が意識していればよい。だが、そこに「歸」するようになると、古詩は名實ともに亡びてしまふと言うのである。自著の書名にも使用した「歸」という文字をわざわざ使い、古詩の亡ぶ原因（「人歸之也」）を述べている點に注意したい。選したものに讀者を「歸」せしむる「選者の權力」という問題は、『詩歸』という書物自体にも差し向けられているのである。冒頭に戻れば、讀者は、古人の全ての詩を『詩歸』に「歸」してはならず、『詩歸』を読むことをきかけとして古人に「歸」することが求められていることになる。

△選△によって差異化される以前には、ただ單に古人が作った無數の詩の廣がりがあるだけという想定が、鍾惺にはあったのかも知れない。△選△はその無方向的な廣がりに操作を加えイメージを賦與するが、讀者は安易にそれに「歸」して

しまう。△選Vが持つこのような危うい力を、鍾惺は「選者の權力」と呼んで注意を喚起する。

2 △選Vをめぐる批判

△全集Vというテキストが、ある書き手による全ての言説を、原則としては価値の序列をつけることなく網羅的に提示するのに對し、△選集Vは、選者が何らかの価値基準に基づいて選擇した言説を、目的論的布置に従って配列することによって成り立つ。△選集Vは、選者が言説を選擇する段階で、既に何かを排除することなしには成立し得ず、排除を代價として何らかのイメージを賦與するのである。したがって、△選集Vの讀者は、選者の企圖によって操作されたイメージに読みを規制されるが、それを意識しなければ、容易に「選者の權力」に靡いてしまうことになる。以下に検討するのは、△選Vが生成するイメージをめぐる批判である。

2-1 「東坡文選序」

現在、蘇東坡（の文）を選する者は多いが、その根本と枝葉（原文「本末」）とを仔細に見分けず、みだりに「趣」の一字で（東坡文の）全てを括ってしまう（原文「以趣之二字盡

之」）。だから、東坡の序記や論策や奏議を読む場合には、無理やり読みおかせて途中で眠くなりやしないかと心配する。ところが、短い尺牘や小文を読むときには、それこそ寢食を忘れて没頭するのだ。李溫陵（李贄）の心眼をもってしても、この弊害を免れないのだから、ましてや李贄ほどの心眼を持たぬ者は言うまでもない。

そもそも、文にあって「趣」とは、必要不可欠のものである。これを人に譬えれば、「趣」は生きるための手段であって、「趣」が死んだら人も死んでしまう。（中略）だから、「趣」とは、生きるにはそれで十分だというだけのものだ。かりに、生きるには十分だというだけのものを取りあげて、東坡の文の全てを括った（原文「以盡東坡文」）としたら、それで良いと言えるだろうか。（「東坡文選序」より）³

「序記」もあれば「論策」「奏議」もある東坡文の多様性が、當時の△選Vによって、「小牘小文」に代表される「趣」のイメージに一元化されていることに對する批判と讀める。この批判が實情に即したものであるか否かは、鍾惺の當時、蘇軾の文がいかなる主導的イメージのもとで受容されていたかの検討を要する問題なので即断は避けたい。⁴ここでは、△選V

をめぐる批判としての言説それ自體の検討を目的とする。

まず、鍾惺の批判は、「趣」というイメージ自體に向けられたものではないことに注意しておきたい。「趣」そのものについて、文に「必要不可欠のもの」として鍾惺も認めているので、批判の中心は「趣」の内實いかになく、「趣」の「二字」を以って東坡の文の全てを「盡」くしてしまうことにある。いささか敷衍すれば、ここでの「盡」は△選Vを行なう選者の側から言ったもので、その△選集Vを読む讀者の側から言えば、「詩歸序」に見える「歸」に相當するだろう。つまり、△選Vすることは、△全集Vの多様性から何かを排除せずにはおかないのだから、選者はそれを以って全てを「盡」くしたとは言えないし、△選集Vの讀者もそこに「歸」してしまつてはならないのである。

だとすれば、この言説は、何らかの特權的イメージによって東坡文を「盡」くそうとする行爲そのものを機能停止させる効果を持つことになるが、所引冒頭の「本末」という語がそれを妨げる。「小牘小文」に「序記」「論策」「奏議」を對置させることにより、「趣」というイメージの相對化をなし得たが、そこに「本末」という序列を持ち込むことで、相對化したイメージの再序列化をもたらししてしまうのである。すなわ

鍾惺の選評に見る批判性（兄島）

ち、特權的イメージとしての「趣」が相對化されたとしても、「本末」という序列に基づく△選Vが行なわれる限り、「趣」とは別のイメージがセリ出して特權化されてしまうのである。この言説は、△選Vによって生成されるイメージの特權性そのものに對する批判には届かない。

2-2 『唐詩歸』の評文

詩はよきものを求めるだけであつて、必ずしもどの詩が一番かを問題にすることはない。昔の人は『詩經』三百篇の中のどの詩が最もよいとか、「古詩十九首」の中のどの詩が最もよいかを問題にしたが、思うにそれも興に乗じての發言であらう。どの句がよいと稱える者は、それぞれ自分の心に感ずるところに従つたまでであり、それに執われて全ての詩を盡くそうというわけではない（原文「非執此以盡全詩」）。しかるに李于鱗がこの詩（王昌齡の「出塞」詩）を唐代七絶の壓卷としたのは、實に頑なである。その等級付け（原文「品題」）の當否はどうあれ、無限に廣がる唐一代の絶句は萬首にとどまらないというのに、必ず一首を求めて第一に位置づけようとするならば、その人の胸中もぼんやりしてしまうだろう。（『唐詩歸』卷十一⁵）

引用したのは『唐詩歸』卷十一所收の王昌齡「出塞」詩に付された鍾惺の總評である。『唐詩歸』は詩人別に詩を採録し、同一詩人の詩が複數にわたる場合には、それらを詩體別に配列する。採録作品の詩題の上には、その作品に對する評價を示す「○○・○○・○○・○○・○○」（上から下へと順に評價が下がる）などの記號を付す。評文の種類は夾批・眉批・總評など多様であり、評語の量も作品によってまちまちである。この言説が對象とする王昌齡詩について言えば、全部で六十五首を收め、七言絶句は十八首が採られている。その中で本詩は七絶の冒頭に置かれ、詩題の上に付された記號は「○」という、なかなかの好評價である。さらに、本詩の詩題と詩句との間には、王昌齡の七絶全般を對象とする評文が付されており、それは明らかな褒辭である。

まず、ここで李攀龍の本詩に對する評價が取り沙汰されるのは、言うまでもなく本詩が『唐詩選』にも採られて著名な作品（但し『唐詩選』では詩題を「從軍行 三」に作る）だからである。『唐詩歸』の編纂動機に、李攀龍・王世貞ら古文辭派への對抗意識、就中、當時盛行していた『唐詩選』に對する批判意識が大きく與っていたことは文學史的常識に屬するが、ここでの批判の在り方は興味深い様相を呈している。

ただ單に『唐詩選』に對する自らの△選集▽『唐詩歸』の優位を示すだけであれば、本詩を採録せず、『唐詩選』に選ばれていない作品から自分の評價基準にかなう作品を「第一」として提示するのが最も直截的な方法となろう。但しその場合、△選▽という方法自体は自明視され、問題は△選▽の結果の當否、すなわち△選集▽としての相對的優劣に絞られることになる。ここで問題とされているのが、そうした相對的優劣でないのは言うまでもない。李攀龍の評價の當否が問題なのではなく、膨大な數ある一時代の絶句の中から、たった一首を選んで「第一」とする「品題」行爲そのものが問題視されているのである。また、昔人が『詩經』や「古詩十九首」の中から「第一」の詩は何かと問題にしたことについては、その詩を以って「全詩」を「盡」くそうとしたわけではないと辯明している。前掲2-1の言説と同様、ここでもまた、何かを△選▽して特權化し、それを以って全てを「盡」くそうとする行爲が批判されている。

ただし、△選▽によって特權化されたイメージを批判するに當たり別のイメージを對置しない點は、2-1と決定的に異なる。むしろ、李攀龍が特權化した七絶にそれなりの高い評價を與えることさえ辭せず、對置を周到に避けているかに

見える。因みに、王昌齡の七絶に關しては、『唐詩歸』に採録する十八首のうち七首が『唐詩選』と重複し、しかもそれらの詩に對する評價は極めて高く(三首は「〇〇」、四首は「〇」)、付されている評語にも、鍾惺が詩に於る最高の境地とした「幽細」などの語が見られるのも興味深い。このことは、本言説が、特權的イメージの相對化を企圖するのではなく、イメージの特權性そのものを批判しようとしていることを意味する。その批判は直ちに、イメージの特權化をもたらずへ選V行爲そのものに向けられるだろう。

以上へ選Vという制度の中に身を置きつつ、同時にそれを問ひにかけようとする鍾惺の言説は、自己言及的たらざるを得ない。すなわちへ選Vによって不可避的にセリ出してくるイメージに對して、いちいち《これを以て全てを「盡」くしたつもりになってはいけない》という注記を施すことにより、ともすると後景に退けられて意識されないへ選Vの操作性を露呈させるのである。「詩歸序」の冒頭に、「古人の詩のすべてが私の選した作品に歸着するというわけではなく、私が選した作品を見た人が古人に歸着することを望む」と言うのも、古人と讀者との間に介在する選者としての「私」を前景化することにより、『詩歸』という選集に施された操作を露

呈させたものと讀める。

3 『唐詩歸』と『唐詩選』

「竟陵派」という文學史的枠組みが働くせいか、『詩歸』という書物は一般に、彼らが標榜した「幽深孤峭」の詩風の反映として自己完結的に讀まれる傾向にある。無論、『詩歸』が發信する評語やその選擇された詩から、「幽深孤峭」のイメージを讀み取ることは十分可能であり、本稿の意圖はそれを否定することにはない。ただ、その評語や選擇の在り方には、先行選集(とりわけ『唐詩選』)に對する批判意識が濃厚に窺われるのもまた事實である。本章では、『唐詩選』と『唐詩歸』との比較對照を試み、その批判の一端を窺ってみたい。

3-1 李攀龍「選唐詩序」

明萬曆刊本を含め現在傳わる『選』には、「選唐詩序」が序文として置かれている。この「序」は、李攀龍の別集『滄溟先生集』卷十八に收められているほか、『古今詩刪』の唐詩部の「序」としても掲げられている。したがって、「序」がもともと『選』の序文として書かれたものかは定かではないが、本稿では李攀龍選として流布した『選』を對象として扱い、「序」

の本来の意圖なるものは問題としない。⁽⁸⁾『歸』の評語が「序」を踏まえて書かれていることを示す立論の必要上、以下に「序」を引用する。テキストによる字句の異同はない。

唐代には（漢魏本来の意味に於ける）五言古詩はなく、あるのは唐の五言古詩である。陳子昂は自分の五言古詩を（本来の）五言古詩と見做すが、これは採録しない。七言古詩は、ただ杜甫だけが初唐の氣格を失わず、思うがままに作って自家藥籠中のものとした。（中略）五言・七言絶句については、まことに唐三百年間に李白ただ一人と言える。（中略）五言律詩・五言排律は、どの詩人も大概よい作品が多い。七言律詩は多くの詩人が難しいとする詩體だが、王維・李頎がほぼ妙域に達している。杜甫でさえも（七言律詩の）詩篇の数は多いが、亂雑でしまりのないものとなってしまうている。

このように詩人たちはそれぞれに苦勞して詩を作っており、やはり天は詩才を生んでも諸體すべてにわたる才能は與えていないのである。後世の諸公は、この選集によって唐詩の全てを知ることが出来るであろう（原文「茲集以盡唐詩」）。唐詩はこの選集に盡くされているのである（原文「唐

詩盡於此」）。

これは李攀龍の數少ない詩論としてもよく知られているが、鍾惺の言説との關連で注目すべきは、結びの「茲集以盡唐詩」「唐詩盡於此」の箇所であろう。前章では、特權的イメージによって全てを「盡」くそうとする行爲を一貫して批判する鍾惺の言説の特徴を指摘したが、李攀龍の「序」こそ、『選』が唐詩を「盡」くす選集であることを高らかに宣言していたのである。

「唐代に五言古詩はない」という斷言に始まり、「序」は詩體別に議論を展開する。全編を通じ、斷言・限定の言い回しを伴って、誰かにその詩體を代表させようとする意圖が見て取れる。實際に『選』は詩體別に詩を配列し、この「序」の考え方を反映させるわけであるが、『歸』は實作を示してそれを相對化し、さらに評文で批判を加える。以下、その評文に即して考察するが、紙幅の都合上、例示は典型的なものに限らざるを得ない。

3—2 五言古詩の採録

「唐代に五言古詩はない」と言い切る「序」を反映し、『選』

が収録する五言古詩は極端に少ない。數を示せば、全四六五首中わずか十六首である。それと對照的に、『歸』は収録總數の三分の一弱、數にして約六〇〇首もの五言古詩を収めるわけであるが、この對照が偶然ではなく操作によるものであることは、鍾惺の評語の隨所に窺われる。例えば、卷八には王維の五古を三十四首も収録するが、その最後に位置する「哭殷遙」詩の直後に、總評として次のように言う。

王維・孟浩然の妙所は五言詩にあり、五言詩の妙所は古詩にある。今人はただ五言の近體詩の良さを知るだけである（原文「今人但知其近體耳」）。唐代の詩人の五言古詩の妙所を読む度に、李于鱗の粗雑でデタラメな言葉を恨みに思わなかったことはない。

ここで言う「李于鱗」の「言葉」が、「序」の冒頭の斷言を指すのは言うまでもない。具體的には、『選』が王維・孟浩然の「近體」に偏り、「古詩」を蔑ろにすることを批判するが、「但知耳」という批判の形式に注意したい。『選』が提示する近體詩を退け、かわりに古詩を稱揚するわけではないのである。その證據に、『選』が収録する王維・孟浩然の近體詩に

鍾惺の選評に見る批判性（兒島）

ついては、『歸』もその多くを重複して採録している。『選』が示す近體詩に對してはそれなりの高い評價を用意しつつも、それに限定されることを批判しているのである。また、顏真卿「題僧皎然」詩（卷二十二）に付された總評は次の通り。

この詩は、きめ細やかで奥深い趣があり、謝靈運にも決して劣らない。それなのに選者はこれを収録せず、みな「唐代に五言古詩はない」の一語で抹殺してしまう。

『選』に本詩を収めない以上、ここで言う「選者」は、直接的には李攀龍を指すのであろうが、それに靡く同時代の「選者」をも含めてよいのかも知れない。いずれにせよ「序」の斷言・限定が邊りに波及し、五古が排除されていることを批判している。五古の収録詩數に於る『歸』と『選』との對照的な關係は、『選』が限定すると同時に排除したものを、『歸』がその批判に於いて露呈させた結果と見ることが出来る。

3-3 特權的イメージの批判・相對化

宋・間の五言排律「下桂江龍目灘」（卷三）に付された評文では、次のように言う。

沈佺期・宋之問は排律で有名だが、いずれも應製詩の諸篇によるものである。(ここに収める)これらの作品は「幽奇深秀」、まさに宋之問が優れた技の持ち主であることを窺わせるが、人は皆それを知らず、ただ「整栗」の二字で沈・宋を盡してしまう。(原文「直以整栗二字盡沈・宋」。難きを畏れ易きに就き、他人の評判を信じて自分の目を信じないのは、實に嘆かましいことだ。

引用した評文は、本詩のみを對象とするものではない。本詩の前には『選』にも収める應製の五排二首を置き、本詩の後には應製以外の五排七首を置くという配列を踏まえた總評である。

まず、本詩の前に置かれた五排二首は、いずれも『選』に収録するものであるから、「沈・宋は應製の排律で有名だ」という冒頭の一文は、『選』によってそうなった²⁾という注を付して讀むべきだろう。さらに本詩を含む以下七首の應製以外の五排が「幽奇深秀」のイメージを持つとし、世人がただ「整栗」のイメージだけで沈・宋を「盡」くそうとすることを批判する。因みに、沈・宋を「整栗」のイメージで捉える言説は、李攀龍のものとしては未見であるが、李氏と併稱され

る古文辭派の王世貞には見られる。

このように、流通する特權的イメージに「專・獨・但・只・直」等の限定語を冠することにより、それが△選▽によって限定されたイメージに過ぎないことを強調する言説は、『唐詩歸』の隨所に見られる。³⁾「古人のすべての詩が私の選した作品に歸するというわけではなく、……と留保する『歸』が、『唐詩』はこの選集に盡くされている」と言って憚らない『選』の約五倍もの詩を収録する現象も、こうした批判の方法がもたらした必然の歸結として理解されよう。『選』が限定すると同時に排除したものを批判に於いて露呈させる分、『歸』は多くの詩を引用することになるのだから。

4 結びに代えて

以上、△選▽をめぐる批判的言説の検討を試みたが、△選▽という方法をとる限り、他ならぬ鍾惺自身の選著もこの批判を免れ得るわけではない。鍾惺がそれを自覺していたことは、『詩歸序』に於いて、「選者の權力」という問題を自著にも差し向けていることから明らかである。だからこそ、鍾惺の批判は、「選者の權力」を乗り越えるのではなく、それを露呈させる方法によってなされたのであり、その意味で自己言及的

たらざるを得なかった。△選Ⅴという方法に無自覺のまま選集が量産された明末、△選Ⅴを自己言及的に問題化する鍾惺の言説は、批評性を獲得し得ていると言えよう。

註

(1) 『隱秀軒集』(上海古籍出版社・一九九二年九月第一版) 卷十六所收。

(2) △選Ⅴの操作を△原文の引用↓竝べ替え↓異化Ⅴの手續きとして捉える認識は、鍾惺の言説中しばしば見られる。例えば、『二十一史撮奇序』『隱秀軒集』卷十六所收)では、『采輯』(廣義の△選Ⅴ)を「自運」(自分で意を用いて書く)と對比させ、『采輯』の本來の在り方を次のように規定する。「古人が書いた事柄や言葉を『采輯』して一書を成す場合、そこに書かれている事柄や言葉が古人から出たものであることを讀者に忘れさせ、自分で著した書(原文「自著」)のように見せなければならぬ。しかも原文を削ったり潤色したりすることなく、何でもないような言葉(原文「尋常口耳」)が、いつのまにか変わった様相(原文「異觀」)を呈していなくてはならない。これは述・作を合わせて一つの心とし、古人と今人とをつなげて一人にする行爲である。今の所謂『采輯』は、お飾りの食べ物のように古人の文章をやたらに羅列・引用するだけで、書物とはとても言えたものではない。」鍾惺によれば、このような手續きを踏んで成った書物は、もはや古人の言説の單なる寄せ集めで

鍾惺の選評に見る批判性(兒島)

はなく、選者の「自著」と見做され、「述」／「作」を區別する傳統的立場は無効化される。

(3) 『隱秀軒集』卷十六所收。

(4) 例えば、王世貞『藝苑厄言』四に「懶倦欲睡時、誦子瞻小文及小詞、亦覺神王。」とある。また、明末には『蘇長公小品』(王納諫評選)なる選集が出版されている。

(5) 早稻田大學所藏『唐詩歸』(明刊本)。

(6) 入谷義高「詩歸について」『東方學報』第十六號・一九四八年) ほか。

(7) 阿部兼也『唐詩歸』詩評用語試探―『說不出』と『深』―『集刊東洋學』二十九號・一九七三年六月)。同「詩評における逆説的表現のもつ意味について―『唐詩歸』の『靜』『深』『幽』などをめぐって―」『東北大學 教養學部紀要』十九號・一九七四年三月)。竟陵派文學研究會の成果として編まれた『竟陵派與晚明文學革新思潮』(武漢大學出版社・一九六七年五月)所收の『詩歸』をめぐる專論など。

(8) 『唐詩歸』の評文を見る限り、鍾惺が李攀龍撰として傳わる『唐詩歸』を踏まえて發言していることは明らかである。このことは、前掲入谷論文が『唐詩歸』卷十七所收の杜甫「後出塞」詩を例に論及している。

(9) 一例を示せば、王維に對する「禪寂閑居」のイメージ(卷八「西施詠」總評)、韋應物に對する「淺淡擬陶」のイメージ(卷二十六・詩人評)などがそれぞれ限定語を伴って批判されている。